

12月第4週の礼拝説教

■日 時：2025年12月28日（日）10：30～11：30 降誕節第1主日礼拝

■説教：保科けい子牧師

■聖書：新約：マタイによる福音書2章1～12節（新約P2）

■説教題：「ひれ伏して幼子を拝み」

■讃美歌：267（ああベツレヘムよ、小さな町。）

256（まぶねのかたえに われは立ちて、）

2025年の最後の主の日になりました。一年を振り返る先週の金曜日12月26日に、CNNから配信されたベツレヘムについてのニュースを偶然見ました。「パレスチナ自治区ヨルダン川西岸にあるイスラエルの占領下で暮らすパレスチナ住民にとって、苦難が続く中で喜びもかき消されている。25日にはベツレヘムの『聖誕教会』でミサが行われた。前日は広場で開かれたクリスマス行事に住民や外国人観光客が詰めかけていた。過去2年の祝賀行事は、ガザの悲惨な戦争に苦しむパレスチナ人に連帯して中止されていた。」という趣旨のニュースが、聖誕教会の内部のミサの様子や、3年ぶりにミサが復活したことでも多くの人々が押し寄せ、煌びやかなイルミネーションや屋台などにぎわう聖誕教会の周囲のお祭り騒ぎの映像と共に、流れてきました。そして、私はベツレヘムの聖誕教会を訪ねた時のことを思い出しておりました。それは1999年11月のことでした。翌年の2000年には、ミレニアムの記念としてローマ法王がイスラエルを訪問されることになっており、イスラエル中がその準備のために工事をしていた記憶があります。時のローマ法王は、1978年10月から2005年4月まで在位されたヨハネ・パウロ2世で、455年ぶりの非イタリア人法王であり、史上初のポーランド人法王でした。また、20世紀中に、最年少で法王となったことでも知られています。昨夜、本日の聖書箇所をもう一度読んでおりました時に、本日の説教題にした「彼らはひれ伏して幼子を拝み」のところで、今ご紹介した今年のクリスマスのベツレヘムの聖誕教会周辺の喧騒と、1999年の静かな聖誕教会のたたずまい、そして、時の法王がまるで「ひれ伏して幼子を拝むかのようにして訪れたであろう2000年の聖誕教会の情景などを思い浮かべておりました。

ところで、マタイによる福音書においては、イエス・キリストの系図に続いて、ダビデ家に属する救い主で、聖霊によって神の子とされるイエスの誕生が天使によってどのようにヨセフに告げられたかを述べた後、星に誘われて東の方からイエスを拝みに来た星占術の学者たちの物語を始めます。マタイによる福音書の著者は、イエス・キリストの誕生を、旧約聖書の預言が成就したものであると考えています。東の方で星を見て「ユダヤ人の王」として生まれた方がいることを知った占星術の学者たちが、その王を礼拝するためにわざわざユダヤまでやって来て、ヘロデ王を表敬訪問したところから始まります。主イエスの時代、「ユダヤ人の王」はメシアと同義で用いられていましたので、そのメシアが誕生したとあっては、ヘロデ王が恐れるのも無理はありません。力で押さえつけてきたユダヤ人たちがその子供を「ユダヤ人の王」として立てて、自分に反旗を翻してくることになるかもしれません。その流れの中で起こった恐ろしい出来事が、本日は読みませんが、16節から18節で記されているベツレヘム周辺における幼児虐殺でした。この出来事は、救い主の誕生という喜ばしい出来事に水を差す理不尽で不可解なものでしたが、そこからかろうじて虐殺を免れてエジプトに落ち延びる幼子イエスの姿に、後の十字架における苦難が暗示されていると言われています。

主イエスはユダヤ人の王としてお生まれになりました。ユダヤ人とは、6節のミカ書5章1節の引用の最後の行に「わたしの民イスラエル」とありますように、主なる神との契約の民であり、主なる神に従って生きる人々でした。そうであるならば、ユダヤ人たちは本来、主なる神が遣わして下さる王を待ち望んでいました。そのユダヤ人たちが、ヘロデ王と同様に、主なる神から遣わされた王の誕生の知らせを聞いて不安を覚えている

のです。また、ユダヤ人が主なる神の民として神に従って生きるための指導者として立てられている祭司や律法学者たちは、聖書の知識を豊富に持っているので、メシアはベツレヘムで生まれることを知っていたのです。けれども、彼らはこの知識を、ヘロデ王が新しく生まれたユダヤ人の真の王を殺してしまおうとするたくらみの片棒をかつぐことに用いたのです。主なる神の民であるはずのユダヤ人たちも、その先頭に立つはずの祭司や律法学者たちも、神がお遣わしになったまことの王を喜び迎えようとせず、受け入れようとせず、かえって不安を覚え、その王を抹殺しようとしている、そういう神の民の姿がここに描かれています。

その一方で、このユダヤ人たちと対照的なのが、東の国からはるばるやって来た占星術の学者たちです。彼らは勿論ユダヤ人ではありません。ユダヤ人たちが、あの人たちは神に選ばれていないと蔑んでいた異邦人です。しかも、彼らは占星術の学者でした。彼らは、天体の動きを観測する、その当時の最先端の学者たちでした。しかしそこには、主なる神の民であるユダヤ人たちにおいては厳しく禁じられている魔術や占いの要素もありました。つまり彼らは、神の民ではない異邦人であり、主なる神が禁じておられる厭うべきことをしている人々、とも言えるのです。そのような人々が、ユダヤ人の王の誕生を知り、その王を拝むために、はるばる遠い道を旅して來たのです。「拝む」と訳されている言葉は、ひれ伏して拝む、礼拝するという意味です。つまり彼らはユダヤ人の王をまことの王として拝み、礼拝するためにやって來たのです。それは本来、主なる神の民であるユダヤ人が真っ先にしなければならないことでした。けれども、そのことをこの異邦人の学者たちがしたのです。マタイによる福音書は、異邦人の学者たちと主なる神の民であるはずのユダヤ人たちとが、神への礼拝の姿勢において全く逆転してしまっていることを描いているのです。

ここで占星術の学者たちが幼子イエスに献げるのが、「黄金、乳香、没薬」です。「黄金」とは、富の象徴、いわば王の権威を表すものもあるのですから、主イエスが王であることを示しています。「乳香」は神殿で燃して用いられるもので、その煙は神の前へと立ち上っていく人々の祈りを表すものとされ、主イエスが神でもあられることを示しています。祭儀には必要不可欠な物でした。そして「没薬」は命の危険が迫った時に用いられるような大事な薬ですが、やがて主イエスが十字架で死なれる備えとして献げられたことを表しています。そして、実はこの「黄金、乳香、没薬」によって、彼らは自分の国では星占いをしていたのです。そういうことを考え合わせますと、彼らは自分の持てる最上のものを持参して主イエスに献げたということもできますが、一方では、そのことによって彼らはもはや占星術が続けられなくなる、つまり彼らは彼らの人生そのものを主イエスに献げたということもできるのです。

彼らの来訪と礼拝は、旧約聖書イザヤ書60章1節から6節の「1・・・あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。・・・3 国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む。・・・6・・・シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る。こうして、主の栄誉が宣べ伝えられる」の成就とも考えられています。主イエスこそが旧約の預言者が預言してきた待望のメシアであるということを明らかにし、それと共にその方が、ユダヤだけではなく全世界の人々が待望してきた救い主でもあられ、その方の前に世界中の人々が膝まずいて礼拝を献げるということが明らかにされているとも言えるのです。そして、この情景を思い浮かべながらいろいろ考えますと、主なる神を信じて生きようとしているはずの私たちですけれども、いざメシアでもある主イエスがお生まれになったと聞くと、はたして、この東方の学者たちのように、導く星だけを頼りにはるか遠くの国まで拝みに出かけることができるだろうか、と思わせられます。ここで本日、特に考えておきたいのは、主イエス・キリストに対する最初の礼拝者とは一体誰か、ということです。クリスマスの出来事を記しているのはマタイによる福音書とルカによる福音書なのですが、礼拝の場面を描いているのは、本日の聖書箇所の「彼らはひれ伏して幼子を拝み」というところのみです。「拝む」と訳されている言葉は、礼拝するという意味です。ここでの救い主イエス・キリストに対する最初の礼拝は、異邦人と呼ばれる、ユダヤ人たちからは軽蔑されているような人たちによって献げられています。繰り返します

が、黄金・乳香・没薬というのは、実は占星術の学者たちにとってのいわば商売道具でもあるのです。それがないと、彼らは占星術を続けられなくなる、そういう物でもあったのです。それを献げてしまったら、彼らはどうなるのでしょうか。自分たちがかつて占星術の学者として権威を持っていた国に戻っても、その道具となるような黄金・乳香・没薬は献げてしまつてないのですから、その占星術には説得力がありません。ですから、ここで描かれているのは、彼らは自分の持てる最上のもの、必要不可欠なものを主イエスに献げてしまつて、もはや自分の生きる術である占星術が続けられなくなるかもしれない、という場面です。

12節を読みます。「ところが、『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰つて行った。」とあります。本来ならば、彼らは最初にヘロデ王に会いに行きましたので、「こういう幼子は確かに生まれていました。その人が救い主になっていくのです」というような報告をヘロデ王にしなければいけないはずでした。けれども、ヘロデのところに帰つてそのまま報告したら、彼らの命もおそらくなくなつていたかもしれません。そして、彼らがやつて来た道とは「別の道を通つて自分たちの国へ帰つて行った」と記されています。それは一見、なんでもない言葉のように見えますけれども、それは今まで自分たちが長年歩んできた道を方向転換する、ということでもあります。示されたように別の道を通つて、けれども別のところに行くのではなく、自分たちがかつて暮らしていた国に帰つていったのです。ここに、実は私たちの歩みと重なるものがあります。私たちも主イエスに会つて礼拝を献げます。その時に私たちも献げものをいたします。私たちの献げもの、それは、私たちが今まで歩んできた道、そして、その道を通つて歩んできた私たち自身です。それを実は礼拝の中で献げているのです。そして、帰り道は別の道を通つて自分のいたところに帰つていくのです。つまり、全く新しくされた者として自分がいたところに帰つていくのです。それは、自分の新しい生き方をしっかりと考えなさい、という勧めの言葉を聞くことでもある、と私は思います。今週のうちに年末となり、新しい年 2026 年になります。私たちは、2025 年の延長上に 2026 年の 1 月 1 日がやつて来る、それが当たり前のことであると思っています。けれども、本日の聖書箇所を今一度しっかりと読み直す時に、神が礼拝において私たちに別の道を示して下さる、ということを知るのです。そして、私たちは今までいたところに戻るけれども、それは今までの自分と同じ存在として戻るのではなく、新しい存在として、新しい生き方をこれから始める者として、戻つていくのだということをしっかりと考えていきたいと思います。

お祈りをします。

主なる神様、2026年の最後の主の日の礼拝を獻げることができ、感謝をいたします。私たちはいつも神様によって行く道が示されております。また、いつも神様から必要なものを必要なだけ与えられております。そのことに感謝をしながら、私たちの持てるすべてのものをこの礼拝において獻げ、私どもの心を全く空しいものとして御前に差し出し、その心に神様からの新しい賜物を注いでいただき、帰路につきたいと思います。そして、新しい2026年を迎えることを願っています。どうぞ一人ひとりがあなたによって強められていきますように。今日この場に集い得なかつた方々の上にも神様の豊かな祝福と導きがありますように。この祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。